居酒屋の加藤周一

「夕陽妄語」はみだし

白沙会◉編

ぼくは仏像が好きだから、仏像の話をしていると一晩中している。ブリューゲルも好きだから、これまた長くなる。かいつまんでお話しさせてもらいます。

京都のまち並みの美しさというのは中国ともヨーロッパとも違ってまったく独特のものです。だから人類の財産です。

「婦人」や「女」を「女性」に言い換えることで何も得るところはないんじゃないか。差別でないように男女の関係を変えていけばいい、言葉の方から変えていくことには反対です。

私もヤクザ映画は観ますよ。どういうところがおもしろいかというと「紋切り型」のつなぎ合わせ。それはひとつの日本独特の美的様式をつくり出していると思います。

明治以後の日本の近代化、工業化に演じた豆腐の役割についておしゃべりしましょう。「トーフィズム」って言ってるんだ。

かもがわ出版

居酒屋の加藤周一

「夕陽妄語」はみだし

白沙会◉編

ISBN4-87699-029-8 C0036

居酒屋の加藤周一
—「夕陽妄語」はみだし—

編　者——白沙会
発行日——一九九一年一二月八日　第一刷発行
　　一九九二年一月一三日　第三刷発行
発行者——田村能史
発行所——株式会社　かもがわ出版
〒604　京都市中京区衣棚通夷川上ル　吉田ビル
電話　〇七五—二一一—三五八七
FAX　〇七五—二一一—三六五七
振替　京都一—一二四三六
印刷・製本——新日本プロセス株式会社

加藤 周一(かとう　しゅういち)プロフィール

国際的にも活躍し、現代日本を代表する思想家。
東京府立一中、一高を経て、東京大学医学部で血液学を専攻。医学博士。幼少から読書に親しみ、フランス文学や日本の古典文学に深い関心を寄せる。学生時代に中村真一郎、福永武彦らと「マチネ・ポエティク」を結成、押韻の定型詩を創る。氏の特徴である合理的批判精神は、戦争中の狂気に対しても揺るがず、学内講演会に招かれた作家横光利一の翼賛演説に異を挟み、これを論破した話はよく知られる。
和漢洋の幅広い教養と繊細な感性をもって、評論・創作活動に従事。海外で暮らすこと多く、その経験から日本文化の特徴は雑種性にあることを見出し、積極的にこの特徴を生かすことを主張する。日本の文学・思想・美術の歴史を世界的視野から見つめる態度は、労作『日本文学史序説』(大佛次郎賞)を生んだ。
カナダ、ドイツ、スイス、アメリカ、イギリス、イタリアの大学で教鞭をとり、1988年4月より立命館大学国際関係学部客員教授。
主な著書は『加藤周一著作集』(全15巻、平凡社)、『羊の歌』(正・続、岩波新書)、『日本文学史序説』(上・下、筑摩書房)、『夕陽妄語』(朝日新聞社)、『梁塵秘抄』(岩波書店)、『日本その心とかたち』(全10巻、平凡社)など。
1919年9月19日、東京生まれ。

はじめに

一九九〇年の春から冬にかけて、私たちは、加藤周一氏と何回か、「勉強会」を持つ機会を得た。いつも、夕刻、その日の午後の講義を終えた氏を、私たちは飲食店や貸し会場の一室で待った。会場には必ず、軽い食事と何本かのビールが用意されていた。私たちは、仕事場から、家庭から、学校から、会場にむかった。何千円かの現金と、当日付けの「朝日新聞」朝刊を持って、私たちは会場に集まる。

一九九〇年の春から冬にかけて、私たちは大きな出来事に直面した。東欧諸国での変動、イラクのクウェート侵攻と「多国籍軍」の展開、東西ドイツの統一…。年表ならぬ日表が必要とされる毎日であったし、同じような状況は今も続いている。そうした時代を背景にして、私たちは、水曜日の夕刻、「勉強会」を重ねていった。本書は、その会の、ほぼ正確な記録という性格を持つ。ほぼ正確というのは、加藤周一氏の発言には、ごく必要な修正・加筆があるだけで、論旨には手が加えられていないという意味であり、会員の私たちの必ずしも他人の眼にふれる必要のない発言はカットされているという意味である。一年後の今日、私たちは、氏の狂いのない思考に、改めて驚かされている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私たちとは、この本の編者である「白沙会」の会員（ティーンエージャーから六〇近い男女）のことである。一人ひとりの会員の自己紹介は「あとがきにかえて」にゆずることにして、「白沙会」について紹介しておきたい。一九八九年九月下旬、加藤周一氏と私たちは、京都・銀閣寺近くの「白沙村荘（はくさそんそう）」に集まった。庭を楽しみ、食事とビールと会話に時を忘れた私たちであった。氏の七〇歳の誕生日をそのようにして祝いたいという私たちの求めに、氏が応じてくださってのことだ。一度では名残惜しい、再度、定期的に顔を合わせて、「勉強会」を持ってほしいとの私たちの希望を、先生は聞き入れてくださった。翌年からの会が「白沙会」と名付けられた所以である。

「勉強会」にはテキストが必要でないか。会員の興味関心が多様であり、氏の「堆積の量」が膨大である。「勉強会」のために「勉強」するのには抵抗がある。そこで、私たちは、テキストとして、当日の「朝日新聞」朝刊を採ることにした。全紙面（広告もふくめて）を使って、会員が問題を投げかけ、氏が考えを述べる。したがって、氏は、この会のために特別の準備をされたわけでなく、毎回が、臨機応変、出たとこ勝負の「勉強会」であった。なぜ「朝日新聞」なのか。氏が月に一回、同紙夕刊に「夕陽妄語」を連載されているというのが、同紙を選んだ、私たちの理由だった。

本書は、第一夜から第六夜で構成されているが、第六夜は「白沙会」が、かもがわ出版と共催した公開講座の記録である。会の発足当初から、私たちは、不特定の人を対象とした企画を検討してきたが、安斎育郎氏とのジョイント講座は、幸いにして参加者の好評を博した。あわせて収録した。

実に辛抱づよくご一緒いただいた加藤周一氏、会の討論をリードしてくださった会代表の安斎育郎氏、会合ごとの実務を担当していただいたかもがわ出版のみなさんに、心からお礼申しあげる。

私たちがグラス片手に意見交換を楽しんだように、読者のみなさんにも、気楽に、「政治評論」とも「社会評論」「芸術評論」とも、「人間とは何か」「歴史とは」を問うた書ともとることのできるこの本を手にしていただければ幸いだ。

一九九一年一〇月一〇日（体育の日、そして白杖安全デー）

井上吉郎（白沙会の司会者として）

もくじ

はじめに

[第一夜]

ワーグナーとドイツ……11

ドイツと日本――戦争責任をめぐって……19

反対意見の保障――フェリス学長宅銃撃事件をめぐって……24

[第二夜]

コジツケオロジー「言葉」……31

日本にみる「言葉」への精神分裂的態度／日韓問題と「お言葉」／権威ある「言葉」／「セクハラ」／「ゴッホ」二四〇億円／連歌と断片の文化／談論風発――「言葉」／談論風発――女性の地位／談論風発――日本的集団

[第三夜]

伎芸天、ブリューゲルに思う……57

暴力団の日本的特徴は？……62

皇室報道をめぐって……65

スポーツ四方山話……69

臓器移植・脳死・「生きること」……74

［第四夜］
日本の近代化と豆腐――閑話休題はみだし……83
どうみる？湾岸危機……87
東西ドイツ統一に際して……96

［第五夜］
〝冠〟を考える……109
京都の位置を考える……114
〝神仏習合〟を考える……117
国連平和協力法案、憲法第九条を考える……120
ロシア革命を考える……126

［第六夜］公開講座
オカルト、超能力、そして…
現代と非合理主義
「超能力」裏面史――人はなぜだまされる　安斎育郎……135
なぜ、神秘主義が流行るのか　加藤周一……154
質問に答えて……165

ちょっと一服・閑話休題
医学部出ても注射のできないドクター!?……28
加藤周一とネクタイ……54
不平屋人生……80
「ヤクザ映画」はお好き?……106
読みやすい文章、内容のない文学
——『ノルウェーの森』をめぐって……132
あとがきにかえて……188

装丁／川本 浩

「第一夜」

一九九〇年四月二五日　静（しずか）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ワーグナーとドイツ

この日の朝日新聞の一面トップは東西ドイツの統合問題。社会面では「ヒットラーが最も愛した『ドイツの心』――『ワーグナー』イスラエルで初演へ」の記事。ワーグナーとドイツ、あるいはヒットラーとの関係は？　音楽と戦争との関係は？　さらにすすんで日本とドイツとの戦後処理の違いはどこからくるのか？　勉強会の出発は、大きなテーマを軸に進みました。

朝日新聞　1990年(平成2年)4月25日　水曜日

経済統合は7月2日

両独首相、会談し合意

2週内に条約概要

ヒットラーが愛したドイツの心――

ワーグナー　イスラエルで初演へ

バレンボイム指揮で「特演」

最初に新聞記事をちょっと補足しておくと、ワーグナー（Wilhelm Richard Wagner, 1813−83）の問題はもちろんナチと絡んできます。ワーグナーを直接絡める考え方もあるし、ワーグナーも含めた音楽家とナチという問題もあります。「ナチに協力した音楽家はわが国では演奏させない」とかね。極端な場合は、査証を出さないというケースもあります。もちろん一番厳しいのはイスラエルです。直接のナチの被害者だから当然ですが、次に厳しいのはアメリカなんです。

たとえばワーグナーの指揮者として非常に有名で、ヒットラーやナチの領袖のいるところでオーケストラを指揮してワーグナーを演奏したことのあるフルトヴェングラー。彼はヒットラーから勲章ももらっていますね。フランスはそのワーグナーとフルトヴェングラーを非常に早い時期か

ら受け入れていました。一九五〇年代の初めに、フルトヴェングラーがドイツのオーケストラを連れてきてパリで演奏することができました。アメリカの場合、ワーグナーは放逐しない。つまりワーグナーの演奏はあるのですが、フルトヴェングラーの入国は拒否しました。アメリカの場合、圧力団体が――主としてユダヤ系ですが、圧力をかけて査証をストップさせるというかたちでした。イスラエルの場合、ワーグナー、指揮者の両者とも入っていくことがなかった。それが初めて演奏されるということで、大きな記事になっているわけです。

そこでワーグナーをどうみるのかという問題ですが、ワーグナーの場合はヒットラーが好きだったということで、ナチの時代に盛んに使われた。ナチの集会でワーグナーが演奏されたりで、大変流行(はや)ったわけです。そういうことがあるから、反ナチの人はワーグナーまで拒むわけですが、ヒットラーが使ったというだけで、ワーグナーそのものはドイツ語圏ではいまなお人気がありますね。ドイツで一人の音楽家を選べというと、モーツァルトでもベートーヴェンでもブラームスでもない、ワーグナーなんです。ウィーンなんかでも、町のおばさんまでいれた人口の半分くらいは「ワーグナー」ということになる。あまり音楽が好きじゃなくても、ワーグナーは好きだという人がいっぱいなんです。ですからワーグナーとドイツ国民という関係は特殊関係ですね。たとえばモーツァルトとオーストリア、ヴェルディとイタリアのような特殊関係。とにかく切り離すことができない。

どうしてそういう特殊関係になっているかというと、少し話が長くなる（笑）。まあ、なぜ反ナチの人がワーグナーを嫌うかということにも繋がるわけですが、一つはワーグナーの主要作品の問題です。大部分の作品はオペラで「マイスタージンガー(Meistersinger)」とか「さまよえるオランダ人」とか、恋愛や芸術の話で戦闘的なナショナリズムとは関係ないんです。ところが

ワーグナーの主要作品はなんといっても四部作の「Der Ring（ニーベルンゲンの指輪）」ですね。この話の中心は、ニーベルンゲン（Niebelungen）の伝説に絡みながら、権力を誰が奪うかというたたかいなんです。話そのものがドイツの神話から発しての権力闘争。しかもキリスト教じゃないんだな。ニーベルンゲンというのはドイツの神話で、排他的なんです。これがドイツ人に好まれ、外から嫌われる理由の一つですね。

それからワーグナーの音楽そのものについていえば、一言でいって「ドイツローマン派の要約、あるいは総合」であって、ドイツローマン派の代表的なものがワーグナーなんですね。もっとも、吉田秀和さん（音楽評論家）と話していたら、ワーグナーはリブレット（歌劇の脚本）も書く。モーツァルトもヴェルディもプッチーニ、ヘンデルもみんな自分では脚本は書かないんですが、ワーグナーは自分で書く。それがあまりたいした脚本ではない（笑）。権力闘争の話が多くて、あまり一流じゃないけれども音楽家としては天才なんですね、吉田さんいわく…。確かに発明が多い。いままで人が鳴らさなかった音を鳴らしている。そういう大変な天才であって、ドイツローマン派を代表しているわけです。

この「ドイツローマン派」というのは、ドイツの文学や芸術の中心問題です。なぜかというと一八世紀まではヨーロッパ的なんです。モーツァルトでも一八世紀にイタリアで生まれたスカラッティの手法、つまりメロディがあってハーモニーをつけるという音楽をふまえている。ベートーヴェンにしても初めはモーツァルトに借りている面があって百パーセントのドイツではない。ドイツローマン派こそは、まさにドイツが最も強く、文学の面でも哲学・音楽でもヨーロッパで影響があった時代ですね。そしてその代表はワーグナーであるということで、ワーグナーはドイツを代表しているのです。フランスでもワーグナーブームがあって「ワーグナー誌」という特別定

期刊行物が出ていたくらいです。まあ、フランスでのブームはわりと短くて第二次大戦後ではあまり好かれていないと思いますが、イタリアではワーグナーの影響が非常に強く残っていますね。

ワーグナーの音楽の話をやり始めるときりがないから（笑）このくらいにしますが、つまり「ワーグナーはナチ」ではないわけです。ナチがワーグナーを利用したけれども、ワーグナーそのものは優れた音楽で、それを演奏することに問題はないと考えるべきですね。ただ、フルトヴェングラーのようにヒットラーの時代の音楽家がナチに協力したというと、ぼくは責任があると思います。フルトヴェングラーはヨーロッパ第一の指揮者の一人だったんですからね。それがヒットラーのいるところで握手をする。それは「ナチは野蛮ではない」という宣伝になるわけでしょう。それはナチの権力を強め、したがってユダヤ人を殺すために手助けをしているということになります。ぼくはそう考えています。

ただ、ワーグナーを生みだしたものとナチを生みだしたものは、まったく無関係ではないと思います。ことに「ニーベルンゲンの指輪」。あれは近親相姦と権力闘争がドロドロと絡んだ話でしょう。あれはフロイト流に言えば、無意識のなかから出てくるところの理性的に制御されない非常に強い情熱、反社会的な情熱の爆発だと思うんです。その実に驚くべき見事な音楽的表現だと思います。だから、人を酔わせる。酒を飲んで「酔う」ではなくて、ドイツ語でいうところの「Rausch（ラウシュ）」。陶酔状態になることですが、フランス語や英語の「ecstasy」とか日本語の「陶酔」は弱いんだな。「Rausch」は実にドイツ語的で、それを喚起するワーグナーの力は非常に強い。「トリスタンとイゾルデ」でもそうですね。トリスタンという騎士とイゾルデという王女の愛と悲劇的な死、という物語ですが、近松の道行の三味線みたいに情緒纏綿（てんめん）という

感じではないんです。聴いているものをつかまえて離さない、もう全身的に憑かれる。いっさいものを考えることを許さない。そういう喚起力を持っているんです。それはやはりワーグナーの天才だろうと思います。

この「Rausch」というのは理性的にコントロールされない感情です。それとドイツ人の非常に体系的で精密な合理的なやり方、この二つがドイツの文化には別々にあると、ぼくは思うんです。一方で理性に制御されない反社会的に爆発し得る感情があり、他方には徹底的に感情とは関係のない非常に抽象的な理性があって、その間に途中の橋がない。それがアウシュビッツをつくったと思う。ワーグナーはその「Rausch」の代表者ですから、絶対にワーグナーとナチは関係がないとは思わない。だからワーグナーを聴かないというわけではないんですが（笑）。そういう関係ですね。

もう少し体験談的に言えば、ぼくは一九五〇年代の初めにパリにいましたが、そこでフルトヴェングラー率いるベルリンのオーケストラの演奏を聴きました。この迫力というものはちょっと異様なるものがありましたね。フランスのオーケストラとは全然違うものだと感じました。もう一つは、やはりその頃の話ですが、ソヴィエトの占領下にあるウィーンに行って「トリスタンとイゾルデ」を観劇しました。当時は占領下にあったから、オペラ劇場の前にはソ連情報部というネオンの赤い文字があり、武装したソ連兵が歩いている。敗戦国だから食べ物もあまりない。しかしその劇場のなかに入れば、そこだけが別天地でね。ウィーンの誇りがオペラに集中していた。だから、その時の「トリスタンとイゾルデ」は舞台と客席が一体となって非常に特殊な迫力がありました。それはさっき言った陶酔状態、「Rausch」なんです。あんなに強力なものに、ぼくはお目にかかったことがない。あれはフランスの文化のなかには無いものです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com